

2016 Vol.9

GLOCAL



■ 近代中国における政治教育～その機能と限界

大澤 肇

■ 古代ギリシアのリベラル・アーツ構想とその近代化:
18世紀フランスにおけるレトリック教育を中心に

玉田敦子



■ 戦国期遠江における堀越氏の動向

内藤剛暉

■ 義和団事件と列強の中国政策

横地佑紀



■ 2015年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式

■ 国際人間学研究科教員による研究会

■ 院生による研究報告会「院生の力」

■ 院生による自主企画勉強会

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポート GLOCAL Vol. 9 をお届け致します。

本研究科では、国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の以上4つの専攻において、院生は各自専門の研究に取り組んでいます。専門性を究めることはもとより重要ですが、それに負けず劣らず重要なのは、他分野の研究内容にも触れることだろうと思われます。専門を異にする院生同士が一堂に会して議論することは、複数の専攻分野からなる大学院にあっては、とても貴重な機会です。

本研究科ではこれまで「院生の力」という名前の院生による研究報告会を定期的を開催してきました。この研究報告会では、指導教授がコメンテーターとして議論に参加する形式をとり、院生の研究能力を高める場として成果を上げてきました。これに加えて、今年度からは院生の自主企画による研究会が始まりました。研究会は本学の中核的な学習施設である「不言実行館」で開催しており、開かれた雰囲気の中、他研究科の院生や学部生、それに教職員にも参加を呼びかけています。

本研究科の院生は、本学の学部教育を終えさらに専門性を深めたいと進学した学生だけではなく、日本に対してつよい関心を抱く中国、ネパール、アメリカ合衆国など海外からの留学生や、現役生活に一区切りをつけなお向学心に燃える社会人院生など多様な人たちが、同じ学びの空間で自己研鑽に励んでいます。

勉学の動機は違っていても、現代という時代にあって、いまだ十分に理解できないものや、つよく関心を引き付けるものを対象に、謙虚な気持ちで学ぼうとする姿勢に変わりはありません。国籍・年齢などの違いを越えてともに勉学に励む院生を間近で見ていると、私自身、教育・研究に向けて居住まいを正さざるを得ない気持ちになります。まさに学問研究は尽きることのない知的営為であり、終わりのない人間陶冶の道でもあります。

GLOCAL 本号は、院生や教員スタッフによる最近の研究活動を中心に紹介しております。これにより本研究科の日頃の活動の一端がご理解いただければ幸いです。

2016年10月15日

林 上 (中部大学国際人間学研究科長)





Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 講師

大澤 肇 (OSAWA Hajime)

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了。博士（学術）。国立公文書館アジア歴史資料センター調査員、(公財) 東洋文庫研究員、ハーバードイェンチン研究所客員研究員等を歴任。専門は中国・台湾を中心とした地域研究（具体的には中国近現代教育史）。歴史史料学、特に史料デジタル化とそれに伴う諸問題にも強い関心を持つ。著書に『新史料からみる中国現代史』（東方書店、共著）など。



近代中国における政治教育～その機能と限界



近代中国における政治教育をどう考えるか

日本において、中国の学校教育については、過去についても現在においても、政治教育、すなわち政府の教化・宣伝の側面（いわゆる「抗日教育論」、「反日教育論」）が強調されるのであるが、それはどの程度まで真実なのであろうか。

被教育者は独自の論理、認識、態度を以て教育を受容（需要）する、という教育社会史の知見からすれば、彼・彼女らは、政府側の教育推進にどのように呼応し、どのように教育を受容（需要）していたのか、すなわち当該時期における学校教育の社会的位置をも解明する必要がある。なぜならば、執政党（政権政党）のイデオロギー色が強い学校教育を政府側が推進していたにしても、それを民衆・社会側が受容しなければ、学校教育の発展・推進はあり得ないからである。

本稿では、現代中国につながる政治体制—党国体制という執政党が国家・国民を代表し得るといふイデオロギーと統治システム—が形作られた1928年から1958年までを対象として、当時の教科書、アーカイブ、教育関係の雑誌や学生向けの雑誌などを利用して、中国における政治教育の実態と社会での反応を、「学校教育の発展・浸透」という観点から考察する。

政治教育の実態

1928年以降の中国、すなわち党国体制下での学校教育の特徴は、独立した政治教育科目を含む政治教育の実施であり、各時期の政府における政治教育には共通性が見られた。

第一に政治教育の内容として、執政党のイデオロギー（蔣介石南京国民政府時期や汪兆銘南京国民政府時期は三民主義、中華人民共和国時期は社会主義）を国家の公定イデオロギーとして宣伝するという意味での共通・連続性が存在した。第二に「党義」、「三民主義」、「政治」という政治教育学科ばかりでなく、隣接科目、すなわち語文、歴史、地理、公民科などにも関係の深い内容が掲載されるという様式である。このように各時期（蔣介石南京国民政府時期、汪兆銘南京国民政府時期、中華人民共和国初期）を通して、学校教育は政府側からは、政治的なイデオロギーの宣伝の場として用いられていたのである。

地域社会統治への活用

さらに党国体制下における学校教育の特徴として、蔣介石南京国民政府、汪兆銘南京国民政府、中華人民共和国政府を通して、教育事業を地域社会把握の1つの拠点としようとした企図が存在したことがあげられる。

その典型的な一例が、1940年代に形成された国民学校制度であった。蔣介石南京国

民政府時期の新生活運動では新生活運動促進会や社会教育団体が民衆の訓練を受け持っていたが、それが戦時の重慶国民政府時期になると、国民学校制度に統合された。この制度は、市場町や自然村のレベルと国民学校＝初等教育機関、そして社会教育機能を一体化させ、場合によっては行政人員との兼任を認めたものである。さらに国民学校を中心国民学校や県教育局の下におくことで、地域社会における、政治・教育・文化の中心となることを目指してつくられた制度であった。これは日中全面戦争という状況下における、重慶国民政府の総力戦体制構築の一環であり、それが日中戦争後の統治にも使われたのである。そして同時期の汪兆銘南京国民政府における清郷運動でも、教員が重要な働きをしていた。

また中華人民共和国政府統治下における土地改革や政治運動への動員も、政府とイデオロギー的に親和性の無い教員・学生層への思想教育という側面がある一方で、彼らを動員することで地域社会の政治秩序を形成・再編する働きがあったといえる。

政治教育に対する社会の反応

しかし、政治教育に対する社会の反応について考察してみると、イデオロギー教化や政治宣伝が必ずしも全てうまくいったわけではないことがわかる。例えば、多くの学生にとって中等学校への進学目的は都市の精神・

頭脳労働に従事するというホワイトカラー的な職業への就職、すなわち都市におけるよりよい豊かな生活への憧れであった。

都市への憧れは、小学教員でも同様だった。小学教員のなかには国民党員である者が多いなど国民党の影響力が強かった。しかし彼・彼女らの大多数は、都市志向であり、よりよい職場を求めて、都市への転任や進学、転職を希望していた。さらに中華人民共和国初期でさえも、大々的に行われた政府の宣伝や政治運動に対して、自らの利害関心や、「合理的」な判断から進学、あるいは退学を希望するような民衆や学生が少なかったのである。

すなわち、政府のイデオロギーや宣伝をそのまま受容し、愛国や「救国」に奮闘した学生や教員は多くなく、すなわち最も強く政治教育を受けているはずの中等教育に属する学生やその後身の教員たちにさえ、その効果は限定的なものにとどまったと言える。

政治教育に対する社会の反応について、日本教育史研究者の広田照幸は、従来の教育史のような無条件の「イデオロギーの内面化」論を批判し、主体的契機や私欲、私利と複雑に結びついていたことを、日本陸軍における将校教育の分析を通して実証した。広田は政治教育を通じた素朴な「イデオロギーの内面化」はありえず、政治教育を通じたイデオロギーの伝達は、人々の行動の準拠価値を一つ増やすものでしかないこと、そして準拠価値同士が整合したり、矛盾したりすることがあり得ると述べている。すなわち、政治教育を受けた人々が、公的なイデオロギーよりも私欲、私利を、制度を改革・破壊させることなく共存させ、既存の制度のなかでそれを追求するということが十分あり得るのである。

政治教育と絡み合った社会化—党国体制下における近代性伝播

前述したように、学校教育における政治教育は執政党のイデオロギーや政治宣伝が中心であったとはいえ、政治教育のなかにはそれ以外の要素を見出すことができる。それは科

挙時代の中国においては、決して普遍的な存在ではなかったナショナリズムや近代的な価値観—衛生・清潔・健康を保つこと、規律・法・時間を守ること、公共（性）を意識する—などである。その多くは1920年代の公民教育運動、あるいはそれ以前の時期からその存在を見出すことができるように、党国体制とは何ら関係の無いものである。しかし党国体制下では、このような近代的な価値観が、執政党のイデオロギーとして、あるいは執政党のイデオロギーと絡み合う形で、上から伝播されようとしたのである。このような「政治教育と絡み合った社会化」こそ、党国体制下、すなわち近代中国における学校教育の特色である。こうした教育のなかで伝達される近代的な価値観は、かつて岩間一弘が指摘したように、また都市部の企業とも親和性が高いものであった。

これは欧米のように、学校文化が特定の社会階層に親和的であったというより、近代中国においては日本と同様、学校教育の体系は社会的階層秩序と対応せず、むしろ学校の伝達する文化が結果的に各社会層の「階層文化」をつくりだすという関係の方が支配的であったと考えられる。

選抜・配分—科学的学校教育観の変容と拡大・浸透

教育社会学で言われる、学校教育の「選抜・配分機能」について、近代中国の学校教育は広い意味では科挙を継承したといえる。ただし、客観的な社会的機能は同じであったとはいえ、科挙は「学びで即仕える」という官吏生活が目標であったのに対し、近代学校教育では、その目標が、都市部におけるホワイトカラー的な生活や職業に変化したといえる。このような技能修得ではなく進学を第一にするという学校教育観や、学校教育が都市部への人材流出を促進するという点については、中華人民共和国が成立した1950年代においても変化せず存在した。むしろ中華人民共和国初期においては、公安条例や農業集団化などで社会の流動性が低くなっていき、1930年代の蒋介石南京国民政府時期には

複数存在した都市への移動ルート（例えば私塾で学び、徒弟となってホワイトカラー的な職員になっていくようなライフコース）が、進学一本のみになってしまった。結果、中華人民共和国初期においては、進学圧力がより高まることになったといえる。

社会的機能と政治的機能の絡み合いから見る学校教育の発展と利用・被利用

学校教育が農村部地域社会に広がる中で、1930年代に中等学校に進学する層に共有されていた学校教育の目的は進学であるという学校観が拡大・浸透していったのが、近代中国における学校教育のもう一つの特色であるといえよう。

学校教育を普及させた政府側の目的は、地域社会の掌握と政治教育の推進—政治宣伝による政府の正当性の調達、支持層の形成—にあった。各時期の政府は学校教育を普及させ、そのなかで政治教育を推進するために、多額の経費と人材を投入したのである。

しかしこうした政治教育のための学校教育の普及は、全てが全て各時期の政府が企図したような、政府に忠実で、公式イデオロギーを信奉するような学生を育成できたわけではなかった。学生たちの多くはむしろ、自己の利益—都市生活へのあこがれ—を最大化することを目的として学校教育を利用したと言える。学校教育の普及はむしろ農村部地域社会に、1930年代の都市中間層に共有されていた、近代学校への進学がより良い生活を得る手段であるというイメージを伝達し、さらに実際に進学を可能にする手段を整えることになったのである。

主要参考文献

- 岩間一弘『上海近代のホワイトカラー』研文出版 2011
 大澤肇「近現代上海・江南の小学教員層」『中国—社会と文化』22号 2007
 大澤肇「南京国民政府の政治教育」『アジア教育史研究』18号 2009
 大澤肇「中華人民共和国初期における学校教育と社会統合」『アジア研究』55巻1号 2009
 大澤肇「近現代中国における中等学生の「進路問題」」『東洋学報』92巻1号 2010
 広田照幸『陸軍将校の教育社会学』世織書房 1997
 陳培豊『同化の同床異夢』三元社 2010



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 准教授

玉田 敦子 (TAMADA Atsuko)

パリ第4大学ソルボン校博士課程修了。Ph. D.(文学)。専門は18世紀フランス文学・思想。18世紀にフランス語で書かれた修辞学教科書、作法書を主な対象とする研究に従事している。主著:『La fondation des mythes nationaux et la notion de sublime (1701-1791)』(Presse de l' Université de Lille III, 2007)。共編著に『近代と未来のはざままで』(風媒社, 2013)、訳書(共訳)に『ルイ十六世』(中央公論社, 2008)『身体史』(藤原書店, 2010)がある。



古代ギリシアのリベラル・アーツ構想とその近代化： 18世紀フランスにおけるレトリック教育を中心に



はじめに

現在、リベラル・アーツと呼ばれる教養教育は、プラトンが『国家』において構想した市民のための教育を原型としている。本論においては、この教養教育のうち、特に「文芸に関する教育」に焦点をしぼり、その来歴をたどりたい。本稿ではまず、古代シチリアにおいて生まれたレトリックが、プラトンによる批判を経て体系化されていく過程を論じる。その上で、プラトンが構想した文芸教育が18世紀フランスでフランス語でおこなわれるようになったレトリック教育に如何に反映されているかを分析する。

古代シチリアにおけるレトリックの生誕

後にプラトンに「レトリック」と名付けられた弁論の術が、古代ギリシアにおいて最初に生まれたのは紀元前5世紀のシチリアの都市国家シラクサである。シラクサは、他のシチリアのポリス同様、僭主に支配されていたが、紀元前5世紀に僭主が追放され、民主政治が始まった。そこで民衆が最初に着手したのは、土地所有権の獲得であった。民衆は、それまで僭主たちが不当に篡奪、専有していた土地を取り戻すための訴訟を起こすことになった。当時は現在の弁護士の役割を果たす専門家がおらず、陪審員制の市民法廷で本人が弁舌を振るう必要があった。そのため、シラクサにはまず法廷弁論を代筆する代筆修辞家が、さらに法廷弁論の技術そのものを伝授する教師が現れたが、この創成期の弁論の技術は全く高尚なものではなかった。訴訟の対象となっ

た土地所有権は僭主の支配下で曖昧になっていたため、法廷における弁論は真実である必要はなく、目的のためならば手段を択ばないという倫理性に欠けるものだったからである。

「非エリート教育」としてのレトリック／ソフィストの術

シチリアで生まれた「レトリック」の技術は、ほどなくアテネに伝わり、レトリック教師たちは職業人としての地位を確立するようになる。アテネにおいて前450年頃に有名になったプロタゴラスが「賢人」という意の「ソフィスト」を名乗って以来、レトリック教師たちは、一般にこの名によって呼ばれるようになった。しかし、こうした経緯により、初期のレトリックは「人を騙す手管」と「金銭」と切り離すことができない「いかがわしい技術」というレッテルを貼られるようになる。

とはいえ、このレトリックが「誰にでも用いることができる」という汎用性を目指した点は特筆に値する。弁論の技術は、講師料を払えば誰にでも手に入るものであり、「買い手」の素質や家柄は不問にふされたからである。

プラトンによるレトリック批判と「リベラル・アーツ」の構想

古代ギリシアにおいて、レトリックに対して最も鋭い批判を重ねたのは、「レトリック」という語の名付け親、プラトンであった。例えばプラトンは『パイロス』においてソフィストを低劣な魂の持ち主が営む職業として警戒するように述べているが、プラトンがソフィスト

を批判するのは、ソフィストが授業料をとって教えると標榜していた徳（アレテー）は、プラトンにとってはパイデラスティアと呼ばれる少年愛を媒介としてのみ伝授される秘術であったからである。プラトンによれば、エロース（性愛）の神がもたらすインスピレーションは詩と音楽の神、ムーサに仕える詩人のものであり、エロースのもたらす狂気に突き動かされた人間が口にすることばが理想の言語である。このためプラトンが相対主義に根ざすソフィストの術に批判的である一方、詩人の言語に対して深い敬意を払うのは偶然ではない。

プラトンは『国家』において、ムーサの神が授ける技術、すなわち文芸と音楽に関する教育の重要性を論じている。古代ギリシアにおけるリベラル・アーツの起源は、一般にはプラトンが『国家』にまとめた教育論とされているが、プラトンは18歳までに文芸と音楽、数学を、18歳～20歳までは体育を自由に学ぶこと提案している。さらに選抜された若者は、20代は発展的な数学を、30～35歳は哲学的問答法すなわち弁証法を身につけ、35～50歳まで実務経験に服した後、50代で政治に参加することが要請されていた。古代ギリシア世界においては、絶え間ない侵略戦争が繰り返られていたが、侵略に成功したポリスの住民男性は、侵略を受けたポリスの住民を奴隷として支配することによって「自由人」として生きていた。プラトンは、この「自由人」の資格として、「自由学芸（アルテース・リーベラーレース）」を求めたのである。

プラトンは文芸の教育の目的を「節制や勇氣や自由闊達さや高邁さ」を識別、認識できるようにすることと論じているが、プラトンに

よれば、文芸を学ぶ意義とはすなわち、ホメロスをはじめとするすぐれた詩人の作品に繰り返し接することにより、その美質を感じ取る能力を涵養することであった（国家 402B~D）。

学問体系としてのレトリックの成立

レトリックはその後、アリストテレスが『レトリック（弁論術）』において、どんな虚偽よりも「真実がもっとも説得力をもつ」と論じたことから、ヨーロッパ的教養のなかに組み込まれていくことになる。そしてその後、紀元前1世紀ごろのローマで刊行されたキケロの『弁論家について』とクインティリアヌスの『弁論家の教育について』がレトリックを一つの学問体系として完成させた。

この古典レトリックの理論は、「発見法」「配置法」「表現法」の三分法で構成されていた。まず「発見法」において、言説の主題にふさわしい話題を見出し、次の「配置法」により話の題材の全体における配置が定められ、「表現法」において、言説の主題をよりよく表現するために効果的な文体を選択するという手順である。レトリックが弁論術として用いられる場合には、この三分法に「記憶法」と「演示法」が加えられた。レトリックは4~5世紀のローマにおいて、文法、レトリック、弁証法の3学と、算術、幾何、天文学、音楽の4科によって構築される自由七科に再編成された。

18世紀フランスにおけるフランス語によるレトリック教育

古代ローマにおいて体系化されたレトリックの理論は、中世においてもヨーロッパにおける知的基盤で有り続けた。その後、ルネサンス期には印刷技術の発明により、キリスト教聖職者を中心にラテン語を共通語とした知的ネットワークが広がり、16~17世紀にはイエズス会などの修道会がコレージュと呼ばれる教育機関において、ラテン語の指導を担うようになった。ところが、フランスにおいては、18世紀になると法曹界の拡大、官僚組織の発展、商業ブルジョワジーの台頭から、高度なフランス語教育の需要が高まり、フランス語によるレトリック教育が実施されるようになる。

コレージュの生徒は「文法課程」において3~4年の文法教育を経た後、「レトリック課程」に進んだ。文法課程がフランス語の正確な用法を習得することを目的としていたのに対して、レトリック課程は文学作品を鑑賞するこ

とによって文章を構築する方法を学ぶ場であった。コレージュの中では、17~18世紀中葉になると、学費を無償化していたイエズス会が運営するコレージュが大きな勢力をもつようになる。コレージュの生徒のうち、貴族階級が占める割合は全体の数パーセントに過ぎず、他の生徒たちは商人、手工業者、農民といった平民であった。イエズス会にとってレトリック教育は優秀な人材を育成し、選別する手段であったが、その一方、学生にとってコレージュにおけるレトリック教育は、高度なフランス語運用能力を身に付けることで社会的上昇を実現するチャンスとなった。実際、フランス革命において「テニスコートの誓い」に加わった平民たちの多くは、このコレージュにおける無償のレトリック教育によって弁論の力を身につけた者たちであった。

アカデミー・フランセーズの言語政策

18世紀フランスの教育においてラテン語からフランス語への転換を推進したのはリシュリューによって1635年に設立されたアカデミーによるトップダウン式の言語政策である。レトリックは理論においても実践においても、「古典」とされるモデルを繰り返し読んで習得するという訓練をととして、鑑識眼を身に付け、判断力を身に付けるという、プラトン以来のリベラル・アーツの伝統を継承していた。このためフランス語によるレトリックの成立には、新たな「古典」、すなわち模範となるモデルを設定することが必要とされた。この新しい「古典」を選定する役割を担っていたのがアカデミー・フランセーズであった。

アカデミーの言語政策の直接の目的は、ホメロス、ウェルギリウスなどの文学作品の言語をそのままの形で残していた古代ラテン語と、フランス語が同じステータスを得ることであった。ラテン語は古代ローマにおいて完成されて以来、古代ラテン文学を規範として一切の変化を許容しない言語として使用されていたが、この古代ラテン語と古代ラテン文学における歴史的関係こそが、アカデミーにとってのフランス語生成のモデルだったのである。

アカデミーの言語政策ではルイ14世期の文学作品がフランス語における「新しい古典／普遍的な参照対象」とされた。例えば当時大きな発言力を持っていた知識人、ヴォルテールは「アカデミーの義務とは文学、言語、そして国家のために、ルイ14世時代のあらゆる

る良書を、その誤りを除去し、純化しながら出版させることである。」と論じているが、こうした文脈の中で、コルネイユ、ラシーヌなどに代表される、フランス・クラシック期の作家の作品はフランス文学における字義通り「黄金時代」を体現する「古典」として称揚されるようになった。

結びにかえて：新たなリベラル・アーツの可能性

古代ギリシアのものにせよ、18世紀フランスのものにせよ、プラトン式のリベラル・アーツは、普遍的な価値をもつ「古典」に立脚する教育は、現代のわれわれにとって古びたものに見えるかもしれない。18世紀においてもイギリスではハチスンが美的判断において普遍的な価値基準はないと述べており、カント以後、この価値判断の問題には答えが出ていない。このため、従来、文芸をめぐる教育において、こうした普遍的な価値基準を設定するのは難しいと考えるのが一般的であった。

しかしながらプラトン式のリベラル・アーツは21世紀の世界にとって、いまだに有益であるということもできるのではないだろうか。もちろん現代社会において、古代シチリアや18世紀フランスの事例をそのまま導入しようとすれば、いかがわしい「愛国教育」を跋扈させることになりかねない。現にフランスでは、2016年8月に、来年の大統領選で次期政権を担うとされる「中道右派」の政治家フランソワ・フィヨンが「国家の物語を再構築しよう！」と声を上げたことが話題となっている。

21世紀にリベラル・アーツを再構築できるとすれば、グローバルなパースペクティブのもとに、世界共通の古典を選び出すことが最初の一步となるだろう。それと同時に各言語におけるローカルな古典も必要である。われわれが新たに選び出す新しい古典は、あくまで「仮想の基盤」に過ぎないかもしれない。けれども、それを意識した上で、新しい教養教育を提案することは可能ではないだろうか。

主要参考文献

- Renée Balibar, *L'institution du français, essai sur le colinquinisme des Carolingiens à la République*, (Paris, PUF, 1985)
François de Dainville, *L'Éducation des Jésuites (XVIème-XVIIIème siècle)*, (Éditions de Minuit, 1978)
オリヴィエ・ルブール『レトリック』（佐野泰雄訳）、白水社〈文庫セジュ〉2000



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 M1

内藤 剛暉 (NAITO Goki)

1993年静岡県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（歴史学・地理学専攻）博士前期課程在学中。専門は日本中世史。現在、15・16世紀における遠江国（現静岡県西部地域）の政治史を中心に研究している。



戦国期遠江における堀越氏の動向



はじめに

戦国期の遠江は、今川氏・斯波氏の支配下にありながらも、同じ今川氏の支配国である駿河などと比べ、中小の領主たちが独自の動きを見せ、上層権力が深く浸透していない状況であった。そうした中で比較的大きな影響力を持っていた中遠の堀越氏について取り上げる。

堀越氏は、南北朝期に堀越（現静岡県袋井市）に根差した家で、別名「遠江今川氏」として名を残し、堀越・見付を中心とした中遠地域に一定の影響力を持っていた。

しかし、この堀越氏については先行研究上でも不明な点が多く、特に15世紀後半における堀越氏の政治的動向については、注目すべき点が多いにもかかわらず、いまだ家名の存続状況すら不明確である。そこで、本報告では、駿河今川氏の遠江侵攻にも影響を与えたとされる「中遠一揆」と「遠州忿劇」以後の堀越氏について報告する。

「中遠一揆」

中遠一揆とは、小木早苗氏が1979年に説いた、長禄年間に中遠一帯で国人や今川庶家が結束して、今川治部少輔を盟主とし、守護斯波氏に対して反乱を起こしたというものである。結果、反乱は守護代らにより鎮圧され、今川治部少輔は討ち死にした。また盟主、

今川治部少輔については範将としている（『駿河の今川氏』第四集 今川氏研究会編 1979年）。

この範将というのが、堀越氏の四代目当主今川範将のことであり、このことから堀越氏が、当時遠江国内でも一定の影響力を保持していたことが分かる。

また、筆者は長禄3年（1459年）の幕府奉行人連署奉書（南禅寺文書）の「～可打入遠江国旨風聞云々」という記載と、『今川家譜』における範将の父貞相の駿河下向に関する記載から、従来の遠江国内のみでの反乱としてとらえるのではなく、今川治部少輔は事件当時、駿河国内に居住していたか、あるいは駿河の勢力とも何らかの関わりがあったのではないかと推測する。

「遠州忿劇」

『今川家譜』によると、永禄6年（1563年）武田信虎・信玄親子は駿河を攻め取るため、当時駿河国を支配していた駿河今川氏の一門である堀越氏と遠江の国人たちをそそのかした。その結果、駿河今川氏当主今川氏真に対し遠江国内で反乱が発生した。氏真はこの出来事を「遠州忿劇」と言い表している。

この反乱に堀越氏は遠江国内の反乱軍方に加わっており、駿河今川氏に対して反旗を翻した。『今川家譜』によると、反乱は駿河今川氏によって鎮圧され、堀越氏当主氏延は自

害したとされている。この反乱により堀越氏は滅亡したと多くの先行研究で説かれている。

しかし、『今川氏系図』（諸井進吾氏所蔵）や『寛政重修諸家譜』に氏延以降の子孫の記録が詳細に残されていることや、『浜松御在城記』の徳川家康による見付城築城計画の記載から、堀越氏の家としての滅亡は無かったと考える。

また、『今川家譜』の記載では判明しなかった「遠州忿劇」の日時に関して、筆者は永禄6年10月の段階で堀越氏の旧領が氏真によって松井氏に与えられている（『今川氏真判物写』土佐国書館集残篇四）ことから、同年10月までに反乱は起きていたと推測する。

おわりに

本研究において、中小の在地勢力ならびに今川氏・斯波氏といった守護勢力が乱立する15・16世紀の遠江国の中で、堀越氏という存在が国府である見付や本拠地堀越で、如何にして家を残そうとしたか、その一端に触れることができた。

今後は、今川氏家臣団内における一門、中小領主のあり方の研究などを対象とするとともに、全国的な日本中世の領主制の事例などを鑑みながら、史料などの考証を重ね、遠江や駿河、三河といった東海地区の中世史像を明らかにしていきたい。



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程

横地 佑紀 (Yokochi Yuki)

1994年愛知県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（歴史学・地理学専攻）博士前期課程在学中。専攻は日本・中国近代外交史。卒業研究では、日本の第一次世界大戦への参戦交渉に関する研究を行った。現在では、卒業研究の中で戦前日本の外交関係上、日英同盟が重要な存在であったことが再認識することができたため、その日英同盟が締結されることの引き金となった義和団事件に焦点を当て、どのような国際外交が展開され、それに日本がどのように関わっていったのかを研究している。



義和団事件と列強の中国政策



義和団事件の発生

義和団事件は当初、反キリスト教運動を中心とした排外活動を行う義和団と、それを鎮圧するために華北へ出動した列強との争いに過ぎなかったが、1900年6月20日、義和団に対して同情的であった清朝政府が列強へ最後通牒を突き付け、翌日には宣戦布告を行ったことによって、国家間戦争へと発展した。事件以前において、列強は互いの権益を侵さないように配慮し、時には利害から協力関係を持ちつつも、基本的には各々が単独で策定した中国政策に則って行動していた。そして、事件当時においても、公使館団が共同行動をとり始めたのは義和団の活動が活発化した後であり、第1次連合軍として北京を目指したシーモア軍も、天津を出発した当初は各国が政治的駆け引きを展開するなど、いまだ列強の中国政策は協調関係にはなかった。

列強の共同行動

しかし、列強は、シーモア軍の挫折や勢いの収まらない義和団の拡大によって協力せざるを得ない状況へと追い込まれ、清朝政府からの宣戦布告を受けたことで、単独から協調へと舵を切り、八ヶ国連合軍を編成して共同行動の下で事件へと対応していった。また、北京にて包囲されていた公使館区においても、イギリスのマクドナルド公使や日本の柴

五郎中佐の指揮下で共同の籠城戦を展開し、八ヶ国連合軍の北京到着までの2ヵ月弱の間、耐え抜くことに成功した。これらの協調体制、特に北京籠城戦に関しては、義和団と清朝による包囲という危機的な状況下から必然的に発生した体制であった。しかし、列強の協調体制は、辛丑和約の結果策定された北京議定書の中で、一部の華北地域での駐兵権が認められたことから、ある程度制度化された体制へと発展し、以降各国はこれを基本として行動し、列強の中国政策は協調したものに变化した。

日本の対応

また、日本は義和団事件を列強と対等的な外交へのデビュー戦と捉え、積極的に行動を起こし、八ヶ国連合軍の中では南下政策をとっていたロシアと並ぶ師団級の兵力の派遣を行い、これはロシアと対立関係にあったイギリスから歓迎された。そして、この事件対応の積極的な姿勢から、末席ではあったものの、列強の一員として迎えられ、中国における協調体制にも参加した。しかし、この日本の積極的な姿勢は、中国政策において協調へと態度を変化させたことによるというよりも、むしろ事件解決に貢献することで列強に認めてもらいたいという願望から出たものではなかったか。そのように捉えると、日本と列強の間には、義和団事件に対する認識に相当の隔たりがあったと考えられる。実際に、

事件発生の背景の1つである、反キリスト教運動に関しては、キリスト教国ではない日本にとって、本来あまり関係のない話であったはずである。

おわりに

先行研究では、各国が義和団に直面することで、中国における民族運動の台頭を認識し、個別での中国政策に限界を感じたことが指摘され、共同行動という妥協策を見出したことが述べられている。しかし、この列強の共同行動は、義和団事件への対応に限った一過性の方策ではなく、辛丑和約後にはある程度制度化された協調体制へと発展した。その後、1930年代には形骸化していたものの、日中戦争から日米開戦の時期まで存在していたことは重要な点である。つまり、この協調体制をかりに維持・発展させることが可能であったのであれば、中国における各国の門戸開放・機会均等が成立し、後に日本を独自行動へと向かわせない可能性もあったといえる。そこで本研究では義和団をめぐる列強の対応を検討することで、どのようにして列強の中国政策が単独から協調へと変化したのか、中国に対するどのような認識の変化があったのか、さらにこの体制にどのような矛盾が存在していたのか明らかにしていく。

2015年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式を開催

2015年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式が2016年3月23日に行われ、言語文化専攻の3名の修了生が晴れて修士の学位を取得した。

言語文化専攻

橋本 英征

「マクライシ」の機能と変遷—火車除けから目印へ—

ラニガン・マシュー

アニメの日本語と日本語教育

—Co-Chuによる現実性および適切性分析—

李 翰林

中国人日本語学習者の依頼発話に見られる「ストラテジー」

—日本語母語話者と比較して—



学位授与式後の記念撮影（恩師・家族らと一緒に）

国際人間学研究科教員による研究会を開催

国際人間学研究科の国際関係学専攻で中国・台湾を中心とした東アジアの地域研究が専門の大澤肇講師と、同じく歴史学・地理学専攻で18世紀フランス文学・ヨーロッパ近代思想が専門の玉田敦子准教授による研究会が2016年7月27日に開催された。研究科所属の教員、院生をはじめ多数の参加があり、活発な議論が行われた。研究会終了後は、会場を移して懇親会が開催され、さらに議論が続けられた。



大澤 肇 講師



玉田 敦子 准教授

中部大学国際人間学研究科主催

第5回 教員研究会

2016年7月27日（水）
研究科委員会終了後（17時30分～）

人文学部 2階 会議室

大澤 肇 講師
国際人間学研究科 国際関係学専攻

「近代中国における学校教育の政治社会史(1928～1958)
—これまでの研究内容の紹介と今後の課題—」

玉田 敦子 准教授
国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻

「近代とリベラルアーツ
—18世紀フランス修辞学を中心に—」

院生・学生の来聴を歓迎します。



研究会風景（興味深い研究内容に耳を傾ける）

院生による研究報告会「院生の力」を開催

第5回「院生の力」研究報告会を2016年7月6日に開催した。修士論文の作成とは別に、院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうのが主な目的である。当日は、歴史学・地理学専攻の2名の院生による研究報告が行われた。院生以外に学部学生の参加もあり、指導教員によるコメントを含め、様々な意見が飛び交った。

第5回「院生の力」研究報告会

2016年7月6日（水）15時30分～17時

人文学部 2階 2522教室

第1報告

内藤 剛暉

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程1年

「戦国期遠江における堀越氏の動向」

コメンテーター：水野 智之准教授（国際人間学研究科歴史学・地理学専攻）

第2報告

横地 佑紀

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程1年

「義和団事件 日本外交の契機」

コメンテーター：一谷 和郎准教授（国際人間学研究科歴史学・地理学専攻）

学部生の来聴を歓迎します。（卒論作成の参考にしてください）



内藤 剛暉（院生：歴史学・地理学専攻）



横地 佑紀（院生：歴史学・地理学専攻）



院生の熱心な研究報告に耳を傾ける参加者



水野 智之 准教授
（歴史学・地理学専攻）



一谷 和郎 准教授
（歴史学・地理学専攻）

院生による自主企画勉強会を実施

2016年度から院生による自主企画勉強会が、月1回の割合で開催されることになった。会場は不言実行館の学生・コモンズ、ラーニング・コモンズで、国際人間学研究科の院生だけでなく、全学の院生や学生の参加も期待し、毎回、熱のこもった議論が交わされている。

**国際人間学研究科院生室
自主勉強会（仮）4月例会**

▶日時：4月27日（水）P.S.H.
▶会場：不言実行館2階
学生・コモンズ

▶報告者：

- ▶15時30分～16時10分
加藤いつみ（言語文化専攻）
「笛の変遷」
復元した笛をお見せして、音色を聞いていただきながら古代尺八、中世尺八、現代尺八の変遷・特徴をお話ししたいと思います。
- ▶16時10分～16時50分
林泰正（歴史学・地理学専攻）
「近代木曾川流域における河川舟運と鉄道整備」
近代木曾川流域において河川舟運が鉄道整備などに伴い、どのように近代的な交通網の中へ組み込まれていったかについて明らかにする。

院生以外（学部生・教職員など）の皆様も、もし興味がありましたらぜひご参加ください。

<次回（5月例会）開催予定>
日時：5月18日（水）P.S.H.（予定）
会場：未定
報告者：佐々木陽平（歴史学・地理学専攻）
（報告者募集中）

**国際人間学研究科院生室
自主勉強会（仮）5月例会**

▶日時：5月25日（水）P.S.H.
▶会場：不言実行館2階
学生・コモンズ

学部生・教員・一般問わず歓迎

《第1部》15時30分～16時10分
Thapa Kabita（国際関係学専攻）
Book Review：A History of the Wife
Author: Marilyn Yalom

《第2部》16時10分～16時50分
佐々木陽平（歴史学・地理学専攻）
「加藤高明と山県有朋」



**国際人間学研究科院生室
自主勉強会6月例会**

▶日時：6月15日（水）15時30分～16時50分
▶会場：不言実行館2階
学生・コモンズ

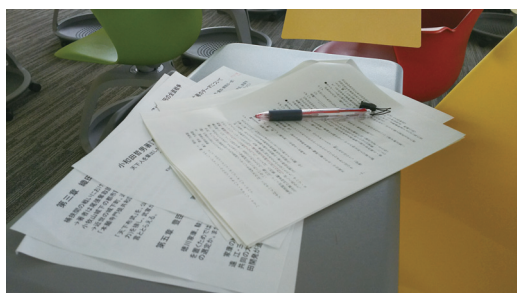
▶報告者：

- ▶15時30分～16時10分
横地佑紀（歴史学・地理学専攻）修士課程1年
「第一次世界大戦への参戦・日本外交の危機」
- ▶16時10分～16時50分
後藤克己（言語文化専攻）修士課程2年
「コーパスを用いた文体比較」あれこれ

院生以外（学部生・教職員など）の皆様も、ふるってご参加ください。

<次回（7月例会）開催予定>
日時：7月20日（水）15時30分～16時50分（予定）
会場：不言実行館2階学生・コモンズ（予定）
報告者：内藤剛暉（歴史学・地理学専攻）
サハ・スニル（国際関係学専攻）

自主勉強会開催の案内ポスター



不言実行館学生・コモンズでの自主勉強会風景

国際人間学研究科のアドミッション・ポリシーと授業科目

中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻は、文化的、歴史的基盤にたちながら、国際社会でコミュニケーション能力や関係構築能力が十分発揮できる人材、あるいは人間、社会、地域の本質を把握し、柔軟に行動できる人材を総力を挙げて育成します。



国際人間学研究科の4つの専攻では、それぞれ以下のような学生の入学を待ち望んでいます。

アドミッション・ポリシー

授業科目

| | 国際関係学専攻 |
|--------|---|
| 博士前期課程 | ① 国際的な政治経済や社会文化に対して関心があり、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境問題の諸分野、あるいは民族・国家の社会文化的特性に関わる分野で知識を深め活躍したいと考えている人 ② 国際的諸課題に対する知的好奇心が旺盛で、課題の究明・解決のために学問的成果を成し遂げ、その成果を社会に還元して自ら貢献したいと強く思っている人 |
| 博士後期課程 | ① 国際的な政治経済や社会文化に対して関心があり、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境問題の諸分野、あるいは民族・国家の社会文化的特性に関わる分野で深めた知識を体系的に整理し、専門的な成果物としてまとめ上げたいと考えている人 ② 国際的諸課題に対する知的好奇心が旺盛で、課題を専門的観点から究明・解決する方法の創出に強い関心をもっており、社会的、学問的に大きく貢献したいと考えている人 |

国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/開発ガバナンス論/発展途上国論/国際社会開発論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/観光人類学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/ヨーロッパ社会文化研究特論/アメリカ社会文化研究特論/中東・アフリカ社会文化研究特論/中国・アジア社会文化研究特論/国際比較文明特論/地域言語特殊研究

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

| 言語文化専攻 | |
|--------|--|
| 博士前期課程 | <p>① ジャーナリズム、英語圏の言語文化、日本語日本文化に対して関心があり、専門的知識、理論、応用力を修得して社会的に貢献したいと考えている人</p> <p>② 実践的なメディア操作、英語学・英米文化学、英語教授法を含む応用言語学、日本語・日本文学、日本語教育の分野で能力を高めたいと考えている人</p> |
| 博士後期課程 | <p>① ジャーナリズム、英語圏の言語文化、日本語日本文化に関する基本的知識を有し、それをベースにさらに学問的観点から学識を深めたいと考えている人</p> <p>② 実践的なメディア操作、英語学・英米文化学、英語教授法を含む応用言語学、日本語・日本文学、日本語教育に関わる研究分野で新たな地平を切り開き、学問的に貢献したいと考えている人</p> |

| 心理学専攻 | |
|--------|---|
| 博士前期課程 | <p>① 教育心理学、認知心理学、知覚心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児心理学、健康心理学などに関心があり、専門知識の修得と分析能力向上に意欲的な人</p> <p>② 一般社会や教育の分野で心理学の知識を生かし、心理学的側面から組織や社会の発展に貢献したいと考えている人</p> |
| 博士後期課程 | <p>① 教育心理学、認知心理学、知覚心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児心理学、健康心理学に関する基本的能力が備わっており、さらにその能力を高めて社会や教育の場で生かしたいと考えている人</p> <p>② 心理学の専門領域で必要とされる最新かつ高度な知識・研究能力を修得し、当該領域の研究内容を深めることで学問的に貢献したいと考えている人</p> |

| 歴史学・地理学専攻 | |
|-----------|--|
| 博士前期課程 | <p>① 世界各地で生起してきた歴史的事象や日本各地で歴史的に繰り広げられてきた種々の現象に対して興味があり、専門的な学問究明によって歴史的真相に迫りたいと強く思っている人、ならびに2)</p> <p>② 種々の空間的スケールで行われている人文現象あるいは自然的営力による諸現象に対して深い関心があり、学問的方法によって空間的現象のメカニズムを究明したいと強く思っている人</p> |
| 博士後期課程 | <p>① 世界的スケールの歴史的事象や日本国内において歴史的に繰り広げられてきた種々の現象を深く究明し、その研究成果を社会や教育の場で生かしたいと思っている人。</p> <p>② 様々な地域的スケールで生じている社会、経済、文化的現象を空間的方法によって追究し、その成果を社会や教育の場で生かしたいと思っている人。</p> |

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリエイティビズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/産業地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導


研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

- 
-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：林 上
 - 発行日：2016年10月15日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
 - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
 - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/